学校だより
希望の鐘
ひとつのつぼみはいちどしかひらかない

八戸市立
小中野中学校
平成３１年３月１９日（火）
No.149 文責：校長 工藤聡

『三六五日×３』の紙飛行機

３年生が卒業し、約一週間がたちました。１・２年生のみなさんが、立派な態度で心をこめて３年生を送ってくれたので、とてもよい式になりました。

私が、３年生に出会ったのは、三年前の四月七日の入学式でした。その時に、中学校生活を過ごすうえで心掛けてもらいたいことを、ＡＫＢ４８の「三六五日の紙飛行機」の歌詞をもとに話をしました。今日は私が見て来た３年生の三年間を、再び「三六五日の紙飛行機」の歌詞にたとえて振り返ってみたいと思います。

「すぐそばのやさしさに／気づかずにいるだけ」という歌詞の通り、１年生の頃の３年生は、ご家族や先生方の心配する気持ちに全く気づかず、気づこうともせず、好きなように振る舞っていたように見えました。ある女子が「私は〇〇高校へ行くから、勉強なんてしなくていいんだ」と言って、全く努力しないということをご家族に聞いた時は、本当に暗澹たる気持ち（アンタンタルキモチ：前途に望みを失い絶望的にな気持ち）になりました。心身のアンバランスが、３年生の視界ばかりでなく心までも狭くした結果ではなかったかと思います。

２年生になると、**「思い通りにならない日は／あした頑張ろう」「折り方を知らなくても／いつのまにか飛ばせるようになる／それが希望／推進力だ／楽しくやろう」**というように、精神的に少しずつ成長し、内向きだった心がしだいに外に向き始めたように思います。学校創立７０周年記念式典において、虎舞やえんぶりのアトラクションで拍手喝采となったのは、２年生もそうですが、何といっても３年生の力が大きかったのです。

そして３年生。「三六五日の紙飛行機」の歌詞の中で、私が一番好きなのは**「距離を競うより／どう飛んだか／どこを飛んだのか／それが一番大切なんだ」**という部分です。学年全体では真っすぐ飛びませんでした。飛んだ距離も短いかもしれません。飛ぶ方向もばらばらでした。しかし、１年生の頃に比較すると、格段の成長を遂げました。昨年の１２月、志望校を決定する三者面談が終わり、親子で帰る時に、さきほどの「勉強しなくてもいい」と言った女子生徒のお母さんが「受験の結果はともかく、目標に向かって頑張る…とこの娘が言ってくれたことが何よりもうれしい」としみじみ私に語ってくれました。

中学生時代最も大切なことは、結果よりもそうなるまでのプロセスです。練習不足でも偶然手に入れた勝利よりも、汗まみれになったり、涙を流しながらも力を出し切った結果の負け(敗戦)の方が、はるかに価値があるのです。それが３年生の三年間に重なります。人生は順調でないことの方が多いのは言うまでもありません。スムーズに行かない時は、苦しくイライラします。しかし、そういった三年間を３年生全員、一人も欠けることなく乗り越えてきたことに大きな価値があるのです。

そのような３年生に、門出の言葉を贈りたいと思います。現在の将棋の世界は、高校生棋士の藤井聡太七段が大活躍していますが、その藤井七段の前に中学２年生でやはりプロの棋士になった人がいます。谷川浩司九段です。この人が「将棋で一番大切なのは、負けを認めること。負けた方はその相手に対して『負けました』と口にしなければなりません。とてもつらい一言ですが、認めることで勝負に責任を持ち、自分の弱点に気づき、成長できるのです」と言っています。３年生の中学校生活も順風満帆ではありませんでした。そのことを素直に省みて、自らの弱い部分に向き合うことで、これからの高校生活が必ずやきらめくものとなっていくはずです。

３年生は、新しい世界に向かって、胸を張って笑顔で飛び立ちました。**「自信持って広げる羽根を」**関係するすべての人たちが見上げ、応援しています。３年生の**「やりたいこと／好きなように／自由にできる夢」**が、今後の人生においてかなえられるよう、心から願っています。１・２年生も３年生に続いてください。

（卒業式の式辞を編集しました。）

小中野中学校だより 希望の鐘 ひとつのつぼみは いちどしかひらかない No.149 平成31年3月19日発行

竹原さんの答辞とハマショーの歌

卒業式は大変立派でしたが、なかでも感動した（させられた）のが、竹原実裕さんの答辞でした。１年生の頃の自分たちのいたらなさ、２年生で頑張ったこと、最高学年として臨んだ三大行事への思い、地域の方々・家族・先生・後輩や同級生への感謝の言葉を、情感たっぷりに話してくれました。特に最後の部分で「校長先生。私たちは校長先生の最後の生徒としてふさわしくなれたでしょうか。私たちにいつも気さくに話しかけてくださり、そして私たちのことを全力で応援してくださる校長先生が、私たちはみんな大好きです。３年間本当にありがとうございました。」と語りかけるように言われた時には、こらえていた涙が止まりませんでした。私の方こそ、みなさんの校長としてふさわしかったのか…と。そして、ある歌詞が頭に浮かんできました。

私が30年以上ずーっと好きなシンガーソングライターに「浜田省吾（ハマダ・ショウゴ）」がいます。略してハマショーと言います。その方面ではかなり有名です。何年かに１回行われる全国ツアーのチケットはなかなか取れません。そんなハマショーの歌詞を、２年前にこの学校だよりの74号で卒業する３年生へのメッセージとして贈りましたが、今の私の心境はまさしくその時のハマショー「君と歩いた道」の歌詞と同じです。

もし１５才のあの夏に戻って ／ そこからもう一度やり直せたら／どんな人生送るだろう？
／ 今よりも若く強い体 ／ 学んだ知恵　活かして ／ 曲がりくねった道を行こうと
迷わない ／ 過ちや躓きを繰り返すことなく ／ 夢の階段　真っ直ぐに駆け上がってゆく
／ 若過ぎて思いやりもなく傷つけ　別れた人達 ／ また出遭えたら　心の絆　失わない
／ だけど　もしも君とどこかですれ違って ／ 出遭うこともなくて愛されないのなら悲劇さ
／ もし１５才のあの夏に戻って ／ そこからもう一度やり直せても ／
この人生を選ぶだろう ／ 君と歩いた道をもう一度歩くだろう

『MY FIRST LOVE』というアルバムに収録されている恋の歌で、「もう一度人生をやり直すことができたとしても、絶対に君と再び一緒に人生を歩くだろう」というものです。みなさんも、そんなに遠くない過去に戻れたらと考えたことはありませんか。この歌詞では「15才の夏（高校１年生の夏だと思います）に戻って人生をやり直すことができたら、今よりも若く強い体（高校１年生ですから当然です。ある意味最も運動機能が発達しつつある時期です。）に、それまでの人生経験をプラスして（要するに若い体に大人の知恵と、さらにもしかすると経験したことが予知能力として入るかもしれません）、希望したり夢見たことを壁にあたったり挫折とかしないで、どんどん実現していこう」ということです。しかし、「君（奥さんでしょうか？それとも恋人でしょうか？）と出遭えなくなるのは困るから、もう一度人生をやり直せることになっても、今と同じ人生を歩くだろう」と結論づけています。

私も人生をやり直すことができて、今と同じ先生という道を選んだとしたら、再び小中野中でみなさんや卒業生と学校生活を送りたいと思います。ただし、校長としてではなく、担任や部活動の顧問として、もっともっと自由にみなさんと話をしたり活動したいと思います。

卒業生もみなさんも、何十年先の将来「もし過去に戻れるとしても、やはり小中野中時代にそのまま戻りたい」と思うような人生や学校生活であればと、心から思います。

【今日のひとりごと】

●卒業式後の見送りでは、それまで晴れていたにもかかわらず突然雨が降り、見送りが終わった途端ウソのように雨があがり太陽が出るという、卒業生の中学校３年間を象徴するような激しさでした。そして、玄関前にはなぜかＨくんの中ズックが、ポツンと一足残されていました。自分の足跡を残したかったのか、はたまた卒業したくなかったのか。それは誰にもわかりません。

●卒業祝賀会では、保護者の皆様のサプライズ演出がいくつかありました。職員の入場の曲が私の式辞にあわせて「３６５日の紙飛行機」であったことや、私の還暦を祝ってくれたことには感激しました。本当にありがとうございました。長く、思い出として大切にします。

●今日の私の似顔絵は、　年　組の　　さんに描いてもらいました。とても元気な感じに描いてくれてうれしいです。先週からの腰痛にプラスして、花粉症の時期になり、鼻の状態が最悪です。ひよりさんの似顔絵は、そんな私に「しっかりしろっ！」と喝を入れてくれるような気がして、パワーをもらいました。